

中学生の自己概念と親の養育態度

—日本と中華民国(台湾)の比較文化的研究—

王 福 順

子どもの自己概念と親の養育態度との間に関連性があることが、従来の欧米の研究で報告されてきた(例えば、Rosenberg, 1965; Coopersmith, 1967; Bachman, 1970; Sears, 1970; Gecas, 1974; Graybill, 1978)。しかし、これらの変数間の関連性は、社会・文化の違いによって、異なった側面をもつ可能性がある。そこで本研究は、比較文化的視点を踏まえ、経済発展の程度や社会文化的・歴史的背景において異なると同時に共通性ももっている、日本と台湾における親の養育態度、中学生の自己概念、およびそれらの関連性を中心として、検討することを目的とする。なお、本研究は、方法的にはイーティック(etic:文化を越えた、普遍性の高い、共通な特性により、それぞれの文化を記述・理解する)な立場に立ち、日本・台湾間で比較可能と思われる尺度を構成し、独立的方法(養育態度は両親に、自己概念は中学生に)により研究を進めていく。

二系列の訳戻し法(back-translation)により、日本・台湾間で比較可能と思われる親の養育態度について、1.受容、2.拒否、3.権威のある(authoritative:Baumrindの1966年の研究による一、子どもに対し厳格だが、温かみがあり、拒否をしない、また、規則の説明や子どもの立場に立って熟考をする)、4.権威主義的(authoritarian:子どもに対し思いやりがなく、強く統制し、拘束が大きく、過干渉である、また、規則の説明や子どもの立場に立って熟考を好まない)の4尺度を構成し、検討を行なった。

養育態度の各尺度間の相関について、受容的態度と拒否的態度とは、日本・台湾いずれも予想の通り負の相関を示していた。権威のある態度と権威主義的な態度とは、台湾では、弱い負の相関傾向を示し、日本においては、弱い正の相関を示していた。これは4尺度の因子構造が、両国間でいくらか異なることを示しているものと思われる。

構成した各尺度において、台湾では両親間の養育態度の相関がかなり高く、また、中学生の性別によっても両親の態度間に差がなかった。日本では、両親間の養育態度の相関は、台湾のそれと比べれば低かった。日本では、母親の方が父親より受容的であり、また、中学生男子に対しては、父親の方がより権威主義的であり、中学生女

子に対しては、母親の方がより権威主義的であった。

こうした日本と台湾との違いは、何らかの社会文化的な状況の差を反映しているものか、単に尺度の性質ないし抽出したサンプルの特性からくるバイアスなのか、現在のところでは明らかではない。

自己概念尺度については、長島・藤原・原野・斎藤・堀(1966, 1967)のSelf-Differential法を参考にして、連想語調査、反対語選定、尺度の構成の3段階をへて、日本・台湾に共通な30尺度が構成された。そして、日本・台湾それぞれの中学性の自己概念を明らかにするため、1.「私という人間」2.「父親からみた私」3.「仲間からみた私」4.「母親からみた私」の4つの概念について、中学生に自己評定を求めた。因子分析の結果、日本と台湾の中学生とでは、自己概念の因子構造が異なっていた。台湾では、明朗性・強靱性・知的能力・情緒安定性の4因子が抽出され、日本の中学生では、明朗性・知的能力・情緒安定性・対人的やさしさ・強靱性の5因子が抽出された。

因子構造に関しては、両国間で「非凡な—平凡な」と「外向的な—内向的な」の2尺度の意味の違いが認められた。これは、「非凡な—平凡な」の尺度が社会文化的・歴史的、また、性役割の要因によって影響されているものと考えられる。台湾の中学生では、男女とも非凡ということを経験のすぐれているものと受けとめているようである。逆に、自分自身が平凡な人間であると思うと、自分も「成績が悪い」「劣った」「頭が悪い」などの望ましくない自己概念を持つ人間のように受けとめている。

日本では、男子にとって、非凡という概念は、社会的通念として望ましい人間の特性のように思われるので、強靱性を示す「強い」「気が強い」「勇敢な」「たのもしい」という望ましい自己概念に寄与している。一方、女子にとって、平凡な人間は、協調性のある、人づきあいの良いなどの望ましい特徴を表わしているため、非凡という概念は、逆に情緒安定性を示す「ふまじめな」「怠惰な」「あきっぽい」「おちつきのない」「不誠実な」「わがままな」などの望ましくない自己概念として受けとられている。

「外向的な」の尺度については、日本では望ましい自己概念のように思われている。しかし、台湾の場合、男

女とも望ましくない自己概念と関連づけている。伝統的な中国人の性格は温和・他者に対する謙虚さ・伝統の遵守・権威および社会的習俗の尊重などによって特徴づけられる(季・楊, 1972; 楊, 1981; 何, 1981)。この伝統的な社会では、無口・内向的・静かななどの特性が高く評価される。そこでは、外向的な特性が望ましくないように思われている。このような中国の伝統的な価値観は、今でも台湾社会においては残っていることが考えられる。

次に、自己概念尺度ごとの比較の結果、全般的に、台湾の中学生は、日本の中学生より肯定的な自己概念を持っている傾向を示している。これは、日本の中学生が、(台湾の中学生より)通常、否定的な評価を受けやすい社会的状況におかれていることを反映しているかもしれない。これは柏木(1983)による総理府の1980年の6か国(日本・アメリカ・イギリス・フランス・タイ・韓国)の国際比較の結果の解釈——日本の小・中学生は、他の5か国よりも否定的な自己概念を持っている、とりわけ知的能力において顕著である——とうまく符合している。

中学生の自己概念と親の養育態度との関連性について、全体的に日本・台湾とも親の受容的・拒否的態度は、中学生の自己概念と密接な関連性を持っていると考えられる。これは従来の研究の結果と一致している(例えば、Rosenberg, 1965; Coopersmith, 1967; Bachman, 1970; Sears, 1970; Gecas, 1974; Graybill, 1978)。子どもに十分な愛情や関心を持ち、子どもを受容し、よく理解しようとする、また子どもを励ましたり、援助したりする親の受容的態度は、子どもの望ましい自己概念と関連性がある。一方、愛情や関心を持たず、子どもの気持ちを理解しようともせず、子どもを負担に思っているかのような親の拒否的態度は、子どもの望ましくない自己概念と関連性がある。

ところが、それらの関連性は、日本が台湾(特に女子)と比較して全体的に弱い。これは日本の場合、特に中学生の時期に、子どもが親から離れ、独立したい気持ちが強くなっていくので、こうした親子関係と自己概念の結びつきは弱くなっていくからなのではないかと解釈された。一方、台湾では、少なくとも中学生においては、まだ親との心理的な絆が強く、家庭での親のとり扱い方といった要因が、子どもの自己概念に影響力を持っているのではなかろうか。

台湾において、父親・母親の受容的・拒否的態度は、男子より特に女子の自己概念と密接な関連性を持っていると考えられる。これは、中国の伝統的な“男尊女卑”の社会通念と関連していると思われる。つまり、台湾においては、女性は職場への進出も少ない。それが自立性の発達を遅らせているのではないか。このことは、当然中学生の男子・女子の家族への依存性を、異なったものとしているはずである。すなわち、中学女子の家庭ないし両親への依存性は、男子のそれよりもずっと強いはずである。その結果として、両親による取り扱いの差は、男子よりも女子の自己概念に強く影響しているのではなかろうか。

日本・台湾とも、両親の権威のある態度と自己概念との関連性は、全体に低かった。台湾の女子において、わずか父親のそうした態度と知的能力の面での望ましい自己概念との関連性が示された程度であった。日本においては、父親の権威のある態度と女子の対人的やさしさの面で望ましくない自己概念と関連するという(台湾とは逆方向のパターンで)結果が得られたにとどまる。

こうした結果は、1つには、権威のある態度の尺度の信頼性と妥当性が低いことによっても生じうる。今1つは、これらの結果が、日本と台湾の中学生のおかれている何らかの社会的状況の差を反映している可能性もある。しかしながら、上記の結果が何に帰因しているかは、今のところ明らかにすべき手掛りを持っていない。

権威主義的な態度については、台湾において、両親の権威主義的な態度は、女子の望ましくない自己概念と、父親のそれは男子の望ましくない自己概念と関連していた。日本では、台湾と比べてこうした関連性は低かった。

これらの結果は、受容的・拒否的態度と自己概念との関連性において見出された知見と類似している。

本研究で得られた知見は、従来報告されてきた欧米での知見、つまり、「子どもの自己概念は同性の親の養育態度と密接な関連性を持っている」と異なっている。これは、社会文化的・歴史的な要因の違いによるものか、あるいは方法論上(従来報告されてきた欧米の研究は、養育態度と自己概念についての情報を同一の子どもから、収集しているものが多い。本研究では、2つのタイプの情報を別々の情報源から収集している)の差によって生じているのかは、今後の研究の発展によって明らかにしていく必要がある。